



2014年 1月5日

2014年

新春に想う

再生産できる付加価値を

人間が食べ物を調達する手段として、狩猟と併せて農業を始めるようになったのは、1万年以上も前に遡るだろう。時代とともに次第に効率よく我々が必要な食料が生産できるようになり、野生動物とは違う時間的余裕ができた。そこに文化が生まれ、新たな技術が加速度的に開発された。文化や文明の太元には農業があった。農業の重要性は未来永劫、変わることはない。



東京農業大学 教授 高野 克己氏

国は、低価格で安定的な食料供給を大きな責務としてきたが、再生産ができた収入が確保できなければ産業としての農業は成り立たない。個人経営や兼業で何とか続けてきた農業も、限界に近づいていく。それ以前は作るだけでなく売ることが、今言われる6次産業に近いような姿が、本来の農業の姿としてあった。それが次第に生産・流通・販売が分担されるようになり、再生産がグローバル化の時代となった今日、単に作って出荷して終わりの農業の時代は過ぎ去った。

日本農業のシステム輸出も

「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録された。日本人の食文化とそれを支えてきた農産物をもっと外国にアピールする機会でもある。手間暇かけ愛情を注いだ、気配りの結晶ともいえる高品質の食料を海外に売り出す。農業には高い倫理性が必要

農業には高い倫理性必要

外国と闘わなければならないとはいえない。問題は中山間地である。過疎化と同じで、土砂崩れも洪水も増え、急速に荒れていく。山は、住む人がいなくなると維持していくことができない。自然に返すのかの判断が必要である。耕作放棄地も行政と関係機関が調整し、農地として貸すようルールづくりが必要だ。先祖代々受け継いだ土地だからこそ、何も申し訳ないことだと思

自然に返すのかの判断が必要である。耕作放棄地も行政と関係機関が調整し、農地として貸すようルールづくりが必要だ。先祖代々受け継いだ土地だからこそ、何も申し訳ないことだと思

「農あつての命」発信を

本学では毎年3千名余の学生が卒業する。その全てが農業に就くわけではないが、このような新しい農業像・農業経営者像をもった人間を育てていきたい。農業という産業のおかげで自分達の命があることを認識し、社会に出て農業に関わらない職業に就いたとしても、その大切さを社会に発信できる人になる。それが、確かに、キウリ

見つめ直し自覚する年に

JAは日本の農業を背負っている団体と認識している。しかし、大学も同様だが、それぞれの組織の本来の役割は何か、もう一度見直す時期にきていると思う。行き先が明確な目標値を掲げられない今の時代、それぞれの組織の中で、この組織があるのは何故か、何故自分達がここにいてのか、原忌に立ち戻って考え直すことをしなければならぬ。それが日本人の良さ

日本農業への期待と担い手の育成